

進化経済学会ニューズレター No. 7

Nov. 1999

進化経済学会事務局

606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部 気付

URL <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/societies/evolution>

tel: 075-753-3427/3455 fax: 075-753-3492 e-mail: yagi@econ.kyoto-u.ac.jp

郵便振替口座：01030-1-22493（進化経済学会）

第2段階にはいる進化経済学会

第7回理事会報告

東京（駿河台）大会研究報告タイトル

オータム・コンファレンス・サマリーズ

ポスター・セッション感想記

第4回入会審査者名簿

平成10年度決算

ニューズレターの発行が遅れたことをお詫びします。

9月のオータム・コンファレンスでは、刺激的なパネル討論だけでなく、若手会員の発案によって、ポスター・セッションも設けられました。内容の充実ぶりに比して参加者が少なかったため、今号のニューズレターはそのサマリーを収録しました。

第4回東京大会の準備は着々と進んでいます。実行委員会の国際アピールに多数の国外研究者からのレスポンスがあり、来年3月25-26日の第4回大会（中央大学駿河台記念館、東京御茶ノ水）では、日本語セッションだけでなく、充実した国際セッションが準備されています。独自のウェブサイトが立ち上げられ、学会のホームページから入れます。東京では関連のプレコンファレンスも開かれます。ぜひ、この大会前後の日程を、いまからご予約にお組みいれください。

また、来年4月からの新役員の選挙もおこなわれました。会長に瀬地山敏会員、副会長に塩沢由典会員が選出され、理事の顔ぶれもかなり変わりました。学会は、ようやく第2段階に入りつつあります。どうぞ、みなさまの創意で、様々なバックグラウンドをもつ研究者が出会う刺激的なフォーラムとして発展させてください。 【事務局】

第7回理事会報告

1999/9/28 学会事務局

1. 第1期役員の第7回理事会は、9月18日の午前11時から午後1時まで、中央大学駿河台記念館で開催された。出席は、13理事、2監査委員、会長の計16人、14理事が委任状を提出した。また、東京大会事務局の1会員が東京大会の企画の説明のために同席した。

2. 入会申込者15名の資格審査をおこない、また8個人会員、1団体賛助会員の退会と、入会意思未確認と誤記による重複記載各1件の名簿記載抹消を承認した。これを算入すると、現在の会員状況は、名誉会員2名、個人会員605名（うち会費について半減対象が105）、賛助会員2団体、計609会員になると報告された。

3. 1998年度の決算と監査報告がおこなわれた。とくに、有斐閣からの『進化経済学とは何か』の出版と会員配布分の購入が、編集料収入も考慮すると100万円以内の純支出で実現できたことと、第3回大阪大会会計の残余金353,417円を収入として受け入れたことが説明された。また、会費の徴収状況にかかわり、会費未納者の除籍措置のおこない方についての議論があった。1999年9月3日付けの会計状況が報告された。

4. 岡村選挙管理委員長から、6月-7月におこなわれた選挙結果の報告があった。投票総数は117であったが、投票者名無記入17と投票期限を過ぎたもの1を除いて有効投票は99会員。会長は瀬地山敏会員が信任多数、副会長は塩沢由典会員が当選、理事会推薦16候補は全員当選、自由投票理事は同得票者があり当選者18、うち辞退1（辞退者を除く理事当選会員氏名は後掲）であった。副会長当選者の理事

当選は無効になるため、今回の選挙による選出理事は32会員になる。なお、得票数の公表はおこなわないことを選挙管理委員会で決めた旨報告され、それを承認した。

理事会推薦リスト（16名）は全員当選：

（abc順）有賀裕二、浅田統一郎、弘岡正明、磯谷明德、金子勝、児玉文雄、室田武、西部忠、西山賢一、岡村東洋光、酒井泰弘、塩沢由典（副会長当選につき理事当選無効）、杉浦克己、鈴木興太郎、山田鋭夫、山脇直司

自由投票による当選者18名（同得票者があるため）：

（abc順）出口弘、海老塚明、長谷川真理子、平野泰朗、平山朝治、池上惇、川勝平太、三土修平、宮本光晴、根岸隆、清水耕一、塩沢谷裕一、植村博恭、宇仁宏幸、八木紀一郎、吉田和男、吉田雅明、ほか辞退者1会員

5. 塩沢編集委員長から、シュプリンガーフェアーク東京から刊行する学会編集のシリーズ第1冊の構成と、第2冊目の進行状況について説明があった。また、これと別に英文出版をおこなう可能性があることが説明された。

6. 第4回東京大会実行委員会から、2000年東京大会への日本語報告の申込みと国際セッションへの参加者について説明があり、10月中に暫定プログラムを作成する旨の説明があった。日本語報告への申込みは35件、国際セッションへの申込みは38件が提示された。連絡漏れなどの可能性もある申込みも含めて、プログラム作成をおこない、採否とセッション配置をおこなう。

国際セッションに予想以上の反響があったことに関わって、その報告者の扱いやとくに招待者や海外からの参加者への補助などのファイナンスについて意見がかわされた。今回の国際セッションは企画型の特別セッションと考

え、非会員の報告者について登録料を徴収しないこと、外部からのファイナンスと関連して国際セッションは学会単独ではなく共催の形式をとる可能性もあること、学会は計上した大会予算だけでなく大阪大会の剰余金をも支出しうることが決定された。

なお、国際セッションの成果を英文学術誌および英文出版によって公表する可能性についても説明された。

7. 第5回福岡大会について、岡村常任理事から2001年3月30(金)31(土)の両日に九州産業大学で開催するが、テーマなどはまだ決定していないという説明があった。(その後、オータム・コンファレンスを9月9日(土)に開催するという連絡が事務局に伝えられた。また、これらの日程はまだ変更もありうるものとお考えください。)

8. その他議題として、事務局から会費半減措置の適用について以下の提案がありました。

- ・ 助手については半減措置を適用できるものとし、テニユアのある専任講師や助教授との間に境界をおく。研究スタッフについても同様に考え、学術奨励研究員や臨時研究員、その他「助手」に近い研究員には半減措置を適用する。

- ・ 大学院を離れた院生については、収入が大卒社会人の平均に達している定職をもつ会員については半減措置は大学院在籍中のみとする。上記のような定職=収入のないなかで研究を続けているもと大学院生については、半減措置を適用できる。

- ・ 在籍証明、収入証明は要求しないが、事務局は半減措置適用会員の状況を毎年確認することが望ましい。

9. 外国学会との関連: International Confederation of Association for the Reform of

Economics (ICARE)にとりあえずオブザーバーとして参加すること、Association for Evolutionary Economics (AFEE)からの名簿交換の提案を受けることが、どちらにも慎重な扱いを求めるという前提で了承された。

10. 現在使用している略称 JAFEE が日本金融・証券計量・工学学会 (The Japanese Association of Financial Econometrics & Engineering) と抵触していることが判明したため、新しい略称を次回の理事会・総会で決めることが提案され了承された。

第4回大会国際セッション

Nonlinear Dynamics

"Debt Effect and Macroeconomic Instability: A Theoretical Approach"

Toichiro Asada, Chuo University

"Attractor Stability in Unemployment and Inflation Rates"

Gaustello Steve, Marquette University

"Market Share Instability and Stock Market Volatility: An Evolutionary Approach"

Willi Semmler, Bielefeld University, in coop. with Mariana Mazzucato, University of Denver

"Theory of Complexity and Economic Dynamics"

Wei-Bin Zhang, National University of Singapore

"Out of Equilibrium Dynamics: Productivity Change with Interactive Agents"

Mauro Gallegati, Universita' di Teramo Italy in cooperation with D.Delli Gatti

"The Problem of Global Environmental Policy in a World of Complex Ecological-Economic Dynamics"

Barkley Rosser, Jr., James Madison

University in cooperation with Kirby L. Kramer
"The Behavior of Solutions of the Nonlinear
Integro-partial Differential Equation in
Mathematical Economics, and its Economic
Meanings"

Minoru Tabata, Kobe University

"Family Expenditure Data in Japan, and the Law
of Demand : Macroscopic Microeconomic View "

Yuji Aruka, Chuo University

"....." to be announced

Taisei Kaizoji, ICU

"Economic Development, Darwin and Catastrophe
Theory; Complex Dynamics with There
Oligopolists"

Tonu Puu, Umea University

"Mathematical Modeling of Evolutionary
Dynamics of Individual/Collective Choice of
'Homo Socials'"

Michael Sonis Michael Dept. of Geography,
Bar-Ilan University, Israel / Dept. of Geography,
University of Illinois at Urbana/Champaign, USA
Panel Discussion

Panelists to be announced!

Innovation and Evolution

"The Japanese FILP System : a Structural VAR
Analysis Approach"

Astier Florence, GATE - University of
Lyon-2 - FRANCE

"Technology Diffusion and Irreversibility in an
Industry with Local Interdependencies"

Patrick Llerena, B.E.T.A. (Bureau
d'Economie Theorique et Appliqu) University
Louis Pasteur

"Universal Laws in Application to Evolutionary
Economics"

Sadtchenko Kirill , Moscow Representative

office of NEC Corporation

"Why the Worse Get on Top: An Evolutionary
Point of View "

Wei-Torng Juang , Institute of Economics,
Academia Sinica

Multiagent System

"Genetic Programming in Agent-Based
Simulation"

Chen Shu-Heng, National Chengchi
University, Taiwan in cooperation with Tzu-Wen
Kuo, and Chia-Hsuan Ye

"A Quantitative Evolutionary Interpretation of
Macroeconomic Behaviour in the Japanese
Economy"

Koichi Hirano, Department of Computer
Science University of Liverpool

"How Important Is Your Reputation in a Multi-
Agent Environment "

Xin Yao, The University of Birmingham,
UK

"Innovation Activities Infrastructure as Multi-
Agent System (as Perm Region (Russia) example)"

Zhanna Mingalyova, Perm State University
in cooperation with Tkachyova Svetlana

"Exploratory Analysis with Boxed Economy
Model: A Prototype toward the Agent-Based
Economics"

Iba Takashi, Keio University

"Equilibrium Price Distribution and Consumer
Search Protocol"

Yasuo Nonaka, Chuo University

"Monopoly and Oligopoly Emerging through
Invisible Hand"

Onozaki Tamotsu, Asahikawa University

"The Impact of Payoff Function and Local
Interaction in a Multi-Agent Environment "

Seo Yeon-Gyu, Yonsei University, Korea in cooperation with Sung-Bae Cho

"Agent-Based Model Toward Organizational Computing "

Keiki Takadama, ATR & Univ. of Tsukuba
"Large-scale Complex Systems with Many Heterogeneous Agents"

Quing Zhao, Aizu University
"Selection of Profit Sharing Rule in Agent-based Simulation"

Tomohisa Yamashita, Hokkaido University in cooperation with Ohuchi Azuma
"Bottom-up Consensus Formation in Voting Game"

Hiroyuki Iizuka, Hokkaido University in cooperation with Keiji Suzuki
"Prediction-based Multi-agents and Their Collective Behavior"

Masao Kubo, National Defense Academy, Hokkaido University in cooperation with Sadayoshi, Mikami

"The Self-governance of Artificial Markets"

Masayuki Ishinishi, National Defense Academy in cooperation with Akira Namatame

"The Complexity of Collective Decision "

Saori Iwanaga, National Defense Academy in cooperation with Hiroshi Sato

Experimental Economics

"Evolution and Ultimatum Bargaining"

Hideki Ishihara, Chiba University

"Pivotal Mechanism and the Truth-telling: An Experimental Study in the Case of Divisible Public Goods"

Toshiji Kawagoe, Saitama University, in cooperation with Toru Mori

"Finding 'No-Regret' Strategy in GHG Emissions

Trading Institutions in the Kyoto Protocol: An Experimental Approach"

Tatsuyoshi Saijo, Osaka University, in cooperation with Yoichi Hizen, Takao Kusakawa, Hidenori Niizawa

"..." to be announced

Shyam Sunder, Pittsburgh University
"The Dynamics of Conspicuous Consumption"

Friedman Daniel, University of California, Santa Cruz in cooperation with Joel Yellin
"Coalition forming and Evolutionary Stable Structure"

Shirley, Ho Dept of Economics, National Chengchi University

"Instability of Babling Equilibrium in Cheap Talk Games: An Experiment "

Toshiji Kawagoe, Saitama University, in cooperation with Hirokazu Takizawa

第4回大会日本語セッション

「V-mart」 (独立セッション)

塩沢由典ほか 大阪市立大学経済学部

「日本型賃金制度の構造と進化」

木村大成 名古屋大学 (院・経済)

「The dynamic time-path question of regionalism」

遠藤正寛 慶應義塾大学商学部

「制度進化とカレツキ——カレツキにおける史的唯物論」

山本英司 京都大学 (院・経済)

「制度進化と公共政策」

海老名一郎 京都大学 (院・経済)

「規範理論のための社会認識の試み」

大山明男 大阪市立大学 (院・経済)

「貨幣信用制度の進化と政府の役割 ハイエク

『貨幣発行自由化論』の含意—」

橋本千津子 北海道大学 (院・経済)
「経済系の化学進化観」
黒石晋 滋賀大学経済学部
「新たな論理学の構築と物理学との融合及び
価値モデル」
香村由紀 アネルバ株式会社
「ホメオティック遺伝子・閉包作用素・カリキ
ュラムと職業選択・細胞文化 社会科学 (複雑
系経済学) と自然科学 (分子生物学) の分析同
一性」
森田壽一 大阪経済大学経済学部
「非平衡非線形経済システムとしての経済シ
ステム」
吉田和男 京都大学経済学研究科
「通貨危機, 均衡為替レート, 為替市場介入」
国枝卓真 京都大学 (院・経済)
「物語言説論と人工社会シミュレーション試
論」
小方孝 山梨大学工学部コンピュー
タ・メディア工学科
「インターネット・オークションのゲーム論的
解析とその進化」
永友哲彰 埼玉大学 (院・経済)
「有限線形市場へのランダムな参入と淘汰に
関するシミュレーション --市場規模と市場
成長スピードの市場結果 (企業数) への影響に
関して- (仮題)」
河野善文 城西大学経済学部非常勤講
師
「J. ラウントリーの構想と実践 自由放任か
ら社会改良へ」
岡村東洋光 九州産業大学経済学部
「方法論争から経済学史を解きほぐす-シュモ
ラー, シュムペーター, クワイン」
柳田香織 東京大学 (院・経済)
「進化経済学へのシュムペーターの貢献」

保住敏彦 愛知大学
「History-friendly な理論をもとめて: 過去と将
来」
八木紀一郎 京都大学経済学研究科
「慣習論」
杉浦克己 帝京大学経済学部
「知識の共有, 伝達, 成長-制度の形成と役割に
ついて」
江頭進 小樽商科大学
「進化経済学の概念と方法 進化・メタファ
ー・シミュレーション」
西部 忠 北海道大学経済学部
「意志決定における内在的選択と外在的選択」
貞岡久里 神戸大学 (院・自然科学)
「起源問題を契機とした交換過程モデル」
中島義裕 大阪工業大学工学部非常
勤講師
「商品と貨幣の非対称性について」
篠原修二 神戸大学 (院・自然科学)
「ハイテク産業の技術進化: agent-based シミュ
レーション分析」
李皓 京都大学 (院・経済)
「日本型産業政策の制度的基礎: 非市場的利益
調整, レントシーキング, 取引コストの視点か
ら」
宗磊 名古屋大学 (院・経済)
「企業の老化と再生」
堀出一郎 麗澤大学国際経済学部
「自由植民を始源とする日本文明の流れと企
業システム」
香村由紀 アネルバ株式会社
「環境配慮行動に関するエージェントベース
モデル分析」
在間敬子 京都大学 (院・経済)
「社会システムの発生と分化 (仮題)」
小山友介 京都大学 (院・経済)

「多層調整企業モデルによる複雑適応系シミュレーション」

吉地 望 北海道大学(院・経済)

「規範と階層的意思決定」

出口 弘 京都大学経済学研究科

進化経済学会オースタム・コンファレンス

21世紀の学融合と進化経済学

パネル基調報告・ポスター発表要旨

[基調報告1] 21世紀の基本科学の基礎—学融合領域と新領域創成科学研究科のコンセプトデザイン—

鳥海光弘(東京大学大学院新領域創成科学研究科教授・複雑理工学専攻)

1998年東京大学は130年の歴史のなかではじめて学部を越えて学問の分野をも越えて新たな研究教育体制を作り上げた。新領域創成科学研究科は東京大学がようやく自立的に学問分野を既成の枠から越えることを目指して構想されたのである。

東京大学はこの130年の間に大きな改組をいくつか経験している。理科大学と法学校を合併して東京大学となり、それが東京帝国大学となって明治、大正、昭和の時代を超し、戦後になって、1949年学制改革のなかで東京大学として再発足して以来、再度1991年に大きな改組を経験した。大学院重点化である。大学院重点化は既存の学部組織をそのまま大学院組織に変更するものであったので、必要とされた研究教育内容の革新を支えるシステムの改変とはいまだなりえていない。

1990年代に入っての日本のサイエンス分野における創造的研究の立ち後は、すでに経済

規模において世界の重大な一環となった日本が果たすべきそれらの分野での創造的進展における役割を分担できないという危険な状況を招く素因となっていた。東京大学はその原因となった研究教育体制の状態を検討し、現状の大学の抱えるイノベーションとインキュベーションに対する戦略が欠如しているという根本的な問題について解決の方策を探ることになった。このひとつの解答は東京大学の持つきわめて多様な学問的リソースを融合する事であった。理学的、人文社会学的には学問分野の刷新は方法論的な革新と対象の革新がある。工学的には素材の革新とニーズの革新もある。こうした革新が学問の細分化と深化のみでは達成されないことはいままでの日本の研究教育体制の結論である。つまり、現行教育研究体制の根本的な変更が必要とされていたのである。その一つが学の融合であると結論づけたのは深刻な事態の進行があったからである。

現在アメリカやイギリス、カナダ、オーストラリアなどの諸国のサイエンス一般の活動は大変に活発である。これらの諸国ではすでに10年前から大学の改革を実行してきた。それが最近になって、加速化し既存のスクールが再編されて、教育研究における情報、生命、脳、新材料等の分野における戦略的融合システムを創りつつある。これらの成果はベンチャー研究を加速化し、新しい研究のテーマを創造しつつある。学融合はこれらの国々では成果を生みだしている。東京大学は学融合をシステムの創出から求めた。既存のスクールの先端部分を同一空間に自由な研究教育の状態で集合し、可能な限りマネジメントから解放することで、最大の研究教育時間を保持できるようにするシステムの構築を目指した。これが新領域創成科学研究科の基本理念である。

[基調報告2] 認識論理とゲーム理論：個人と社会

金子 守 (筑波大 社会工学系)

経済学やゲーム理論においては、個人の行為は社会的変数(市場価格など)によって決定づけられるのと考えてるのが普通である。その際、他人の行為は各個人の利得に影響するが、各個人の identity は普遍と仮定されている。より正確に言えば、個人の identity が普遍であるという仮定を論ずることのできる枠組みは用意されておらず、個人の identity を表す効用関数やゲームのルールが固定されたもとで理論が構成されているのである。

しかし、個人の identity が社会と独立であるという方法論では捉える事のできない現象も数多くあり、例えば、好みや思考の傾向・行動原理の選択・社会観の形成などがある。これらの現象を考えるのに際して、報告者は個人の認識論的側面が鍵になると考えている。本報告では、社会的環境における個人の認識論的側面とその影響の分析についての報告を行なう。

まず、個人の認識論的側面をどのように記述するかという問題に直面する。この問題にたいして、報告者は数理論理学、特に様相論理学の一分野である認識論理学からのアプローチを採用する。なぜ数理論理学を選ぶのかという理由は、論理学は(人間の)思考に関しての学問であり、記号操作(言語)と意味(解釈)などの厳密な取り扱いを可能にするからである。ただ既存の認識論理学の体系では複数の個人は考えず、特に社会的環境における個人の思考は考察の対象にしないので、経済学やゲーム理論と直接には結びつかない。そのため、複数人

の主体がいる認識論理学を発展させる必要がある。報告者は、このような認識論理学をゲーム理論への応用とともに発展させている。

認識論理によってゲーム理論にアプローチすることで、主体の信念・知識の役割を分析することが可能になる。しかし、このアプローチだけでは信念・知識の起源や進化・発展についての考察はできない。その問題を考えるのには、経験から信念や知識をどのように個人が獲得するかを考察せねばならない。報告者はこの問題にたいして 帰納的ゲーム理論という枠組みを発展させている。この枠組みにおいては、上記の個人の認識論的側面が社会的環境にどのように影響されるかを考察の対象にすることができる。

報告者の研究計画は、認識論理的アプローチと帰納的ゲーム理論とにより、個人の思考と社会的環境を接続し、個人の identity と社会的環境との相互関係を分析することである。

[基調報告3] 経済学と物理学の新たな出会い 高安秀樹 (ソニーコンピュータサイエンス研究所)

経済学は人間の欲望に絡んだ金銭に関する研究であり、物理学は人間の存在にかかわらず成立する物質の法則に関する研究であり、両者には直接的にはなんの関係もないように思われがちである。しかし、需要と供給の均衡にバネのアナロジーがしばしば使われることに象徴されるように、経済学の基本的な部分には、物理学の概念や手法が多く使われているし、また、物理学全般に大きな影響を与えた概念であるフラクタルは、そもそも、価格の変動の解析に端を発していることが示すように、経済学から物理学への貢献もある。

最近、経済学と物理学との新たな出会いがあり、経済物理学という新しい分野ができつつある。この新しい分野は、物理学、特に、統計物理学のセンスで経済現象を解析しようという動きで、既に、多くの統計物理学者や経済学者を巻き込んでいる。統計物理学は体系を構成する素子のミクロなダイナミクスが与えられた時に、無数素子の集合体である体系全体の自明でないマクロな振舞を探る学問分野であり、相転移やフラクタル、カオス、等のキーワードが中心的な役割を演じ、物質系に限定せずに様々な複雑な現象の解明に成功している。そこでこのデータ解析手法を用いて経験則を見出し、数理モデルを通してそれらの法則性の成立する条件を明確にしていこうというのが経済物理学の狙いである。

経済物理学で、今、話題になっているトピックスは、主に次の3つである。

- 1 ゆらぎを考慮すると需要と供給の均衡を外す戦略を取る方が有利であること
- 2 企業の所得や資産の変動に普遍的なスケールリング則が成立していること
- 3 株や為替の変動が相転移の臨界的振舞を示し、フラクタル的な性質を持つ変動をしていること

これらのトピックスを通して、経済学と物理学が文字通り融合した新しい学問分野が既に誕生し、成長しつつある現状を紹介する予定である。

[基調報告4] 複雑性の原理

中村量空 (福井県立大学)

中村氏は当日入院中の為欠席。

1 複雑さとは何か？

「複雑さ」を「科学的」に解明するというの

は魅力あるテーマである。しかしどの程度まで解明可能なのか？

E. シュレーディンガーによる「科学」の二つの原理。客観化の原理と理解可能性の原理。

「複雑さ」には主観的な要素が含まれている。理解可能でも「複雑」というのか？構成要素の量の多さや、計算時間の長さを尺度にして「複雑度」を測るという考え方は以前からあった。

「複雑さ」を「関心の高さ」に結び付ける考え方もある。簡単に理解できる場合と、まったく理解できない場合には「関心の高さ=関心度」は低くなる。ほどよいむずかしさが関心を高め、「複雑さ」を実感させてくれる。

複雑なシステムの四つの特性。

- ・非線形性 (エージェント間の相互作用)
- ・開放性 (モノや情報などの流れ)
- ・適応性 (変動する市場への対応)
- ・自己組織性 (エージェントの自律的な組織化)

2 複雑度の指標

何を複雑度の指標にするか？

乱雑度の指標は「エントロピー」と呼ばれる量で、C. E. シャノンがこれを、必要な「情報量」と考えた。乱雑度が最大の状態になると、でたらめに並んだトランプと同じように、まったく偏りがなくなってしまう。逆に、秩序化したシステムには秩序化を示すマクロな量の指標があり、これを「秩序パラメータ」と呼ぶ。

「複雑さ」は「秩序」と「乱雑」のあいだにある。

乱雑な状態は、乱数などを用いた統計的な手法を使って処理することができる。秩序状態のほうは物理法則の理論で理解することが可能である。

明らかな秩序があるわけではないが乱雑でもない。この中途半端な状態こそが複雑で、変

化の予測が困難な状態なのである。

物理的に見た複雑なシステムの特徴。

・個々の要素はバラバラではないし、一つのクラスターに固まるのでもない。

・クラスターは多重のクラスターを形成し、それらがまた要素に分解する。

・システムの状態を表現する状態関数は変動する。

クラスターが形成する「階層構造のパターンの多さ」は、システムの「多様性」を表わしている。このパターン量が「複雑度の指標」になるだろう。

3 複雑性と時間

複雑なシステムが厄介なのは、変動の長期予測ができないからである。株価の変動や商品の売れ行きなど、長期予測のできないものは一般に複雑だといわれている。

状態関数の振舞を「確率過程」として解析する方法がある。これはマルコフ過程と呼ばれるものである。マルコフ過程は、1ステップ前の過程に依存するだけで、この過程には過去の記憶はないし、過去の履歴に依存する要素はない。

しかし一般に、複雑な過程は何らかの形で過去を引きずっているものである（非マルコフ過程）。過去の履歴や記憶を状態関数にどのように取り込むかが重要なのである。

[基調報告5] 社会的リアリティの捉え方-文理融合のアプローチ

今田高俊（東京工業大学）

リアリティと格闘する

近代社会は高度な専門分化を遂げることで諸科学の発達をもたらした。自然科学、社会科学、人文科学という3領域への分化は言うに及ばず、これらの各領域においても細分化が進ん

でいる。その弊害として諸学の「蛸つぼ化」や「象牙の塔」としての大学が指摘され、科学研究の現実味喪失が批判の対象になっている。

あらゆる科学の究極の目的はリアリティ（現実）をどう捉えるかにあることを確認すべきである。M・ウェーバーは社会の理解科学を提唱するに際し、その対象を「意味付与された現象」にあるとし、意味の理解科学によって、自然科学や人文科学の手法をも取り込んだ、社会科学の統一を考えた。

私はすべての科学に共通する方法のジーン（遺伝子型）として、「認識の存在接続」を考える。普遍的かつ抽象的なリアリティ（たとえばエントロピーの法則）を研究対象とするのが《仮説演繹法》で、これは仮説認識を演繹法によって反証可能な存在に接続する。これに対し、具体的かつ一般化可能なリアリティ（調査統計データによる検証）を対象とするのが《観測帰納法》で、データの観察認識を帰納法によって検証可能な存在に接続する。さらに、《意味解釈法》は個別的で特殊なリアリティ（たとえば「粋」の精神）を了解可能な存在に接続する。これらすべての方法によってリアリティが把握可能になる。特定の方法が優れているわけではない。このことは、犯罪リアリティの成立要件が、アリバイ崩し（演繹法）、物証（帰納法）、動機（解釈法）の3つであるのと同じである。3つの方法を自在に操る変換理性が必要である。

文理の隙間が問題

最近、文系や理系の学問が単独で対処しきれない社会問題が多発するようになってきている。生態系の危機と地球環境問題、生命倫理の問題がそれ。さらに、阪神大震災の際には、危機管理に対する技術系の専門家と社会系の専門家の連携の悪さが指摘された。現代社会は高度に機

能分化したことで、学際協力型のアプローチでは対処しきれず、文理融合型のアプローチが求められている。

文理融合の一方法として、「意思決定」をキーワードにするのが有力である。これまで意思決定に関する学問分野は、文系では経営学、理系ではORである。今後、意思決定学は人文科学、社会科学、自然科学全域にまたがる知識の動員が必要である。複雑系の科学運動が高まっていることも文理融合の流れにそうものである。その背景には、近代科学が金科玉条としてきた方法的立場では、現実を的確に認識できないという不信感がある。オブジェクト指向型のシミュレーションでは、対象自身に認識作用を認め、自分の振る舞いを自己決定できるようにしている。とくに、複雑系はカオスと密接な関係にあるとされている点は注目に値する。従来、社会現象は自然現象以上に不規則で、断片的で、気まぐれなものと言われてきたが、自然も同じような性質を持つことが認知されたことは、自然科学と社会科学の溝を埋め、文理融合を促進するのに大いに貢献するだろう。

[ポスター発表1] 集団の知的創発性についての組織論的考察—電子ブレインストーミングの実験をきっかけに—

阿部孝太郎（小樽商科大学）

本報告は、人間の集団においていかに知的な創発性が生まれるのかというテーマの一端を、電子ブレインストーミングの実験等をきっかけにして分析していこうという試みである。実験は、電子会議(いわゆるチャット用で代替)でブレインストーミングを行った場合と、対面型でそれを行った場合とで、出されたアイデア

の質・量に有意な差が出るのかどうかを検証しようとするものである。(被験者は学生。質の評価者は大学の教官4名があたった。結果は当日発表。)

イノベーション(本報告の用語では知的な創発性)に関して、社会科学においてはそれが起こった後どうなるのかという事後的な分析が多く、どうしてイノベーションがおきるのかという、それ自体のメカニズムの解明に関しては、経営学の分野でナレッジ・マネジメントというテーマで近年ようやく主題にされにされるようになったが、数的にはまだ少ないように思える。(経済学における例外として、青木昌彦とN・ローゼンバークらの業績があげられる。これらと本研究の関わりについては最後に言及する。)

本報告ではしたがって、知的な創発性に関する社会科学の方法論及びそのあり方についても検討したい。具体的に言うなら、実験(あるいはシミュレーション)における結果と現実の動きには(今回のテーマのように)しばしばズレが生じている。したがって、今後、社会(認知)心理学や実験経済学における実験と、現実のケース・スタディー(歴史ないしはフィールドワーク等による「濃い記述」が必要であろう)を比較し、そのズレがいかんして生じるのかを解明することが肝要であると考えられる。

最後に、本研究と既存の(進化)経済学との関わりだが、たとえば、青木昌彦(『経済システムの進化と多元性』第二章)の「情報同化型組織」と「情報異化型組織」におけるそれぞれの優位性等の検証に役立つのではないだろうか。

[ポスター発表2] 国際経済における地域経済統合機構形成のシミュレーション分析

遠藤正寛（慶應義塾大学商学部）

期待形成仮説の再検討

吉地 望 (北海道大学・院・経済)

この報告は、地域経済統合機構に関する2つの問題意識について、国際貿易の差別的寡占モデルと政治経済学モデルの枠組みを用いて分析するものである。

ここで分析の対象とする問題意識のうちの1つは、地域経済統合機構の締結誘因ないし安定性である。これは、最恵国待遇に基づいてすべての相手国との貿易を自由化するよりも、特惠貿易協定によってある特定の国とのみ自由化を進めることを選択する理由と、そのような特惠貿易協定が安定的に存在できるかどうかを明らかにしようとするものである。もう1つの問題意識は、"the dynamic time-path question"である。これは、地域経済統合機構の dynamic effect によって将来の通商体制がどのような姿になるのかを探るものである。

分析の手順としては、まず政策決定に影響を与える複数のエージェントを考慮した国際貿易の差別的寡占モデルを提示し、モデルの基本的な特徴を説明する。ここで、地域経済統合機構の締結誘因について考え、さらに地域主義に関する2つの「シンドローム」（「我々のマーケットは十分に大きい」シンドロームと「ここは我々のマーケットだ」シンドローム）について触れる。次に、この基本モデルを基にシミュレーション分析を行い、各国間の交渉ルールや交渉環境の違いによって地域経済統合機構の "the dynamic time-path" が変わっていくことを示し、現在の「地域主義(Regionalism)」が将来ブロック経済に陥らないための条件を考察する。最後に、本分析の結論から得られる、現在の「地域主義」の高まりへのインプリケーションを述べる。

[ポスター発表3] 外国為替相場理論における

報告は不確実性下の期待形成仮説の再検討である。期待形成仮説が金融市場や為替市場で重要なことは言うまでもないが、経済学はこの難問に満足に答えてこなかった。静学的期待、適応的期待、合理的期待仮説などが登場し、時代背景のなかである程度の意味を持った。しかし、これほどまでに大きく変動する株価や為替レートを理解する上で、現行の期待仮説が不十分であることは明らかである。

今回は、従来の期待形成仮説の問題点を指摘し、為替レート変動を理解する上でどのような期待形成仮説が求められているかを示す。特に、金融市場や為替市場においては、期待と経済事象との相互規定関係である再帰性が強く働くことを意識する必要がある。これは同時にミクロ・マクロ・ループの問題を考えることでもある。その上で、為替レートの変動特性について考察してみたい。

期待形成仮説を再検討するには、経済人の持つ経済的合理性と方法論的個人主義と対峙する新しい経済人の模索から始める必要がある。新しい経済人は、課題環境の複雑さにより経済的合理性を達成困難であり、発見的探索法のような方法を用いて、課題環境に適応するような経済主体である。もちろん、発見的探索法は予測と結果が一致する保証は何処にもなく、判断のバイアスが生じやすいことでも知られている。このバイアスは方法論的個人主義から生じ得ない群集心理により自己強化される可能性を持つ。バンドワゴンやバブルの理解に一助を与えることを意図している。為替市場における発見的探索法は、テクニカル分析とファンダメンタル分析を用いていると想定し

た。テクニカル分析はアクセス容易性、ファンダメンタル分析はシナリオ思考といった発見的探索法であると考えられるからである。

特に今回は、相場を予測するシナリオ思考(仮説)がどのようなパターンを持つかについて、仮説の進化という形で、検討を加える予定である。

[ポスター発表4] 起源問題と価値形態

中島義裕(大阪工業大学工学部非常勤)

進化の問題は、しばしば起源問題として取り上げられて来た。起源問題が成立するのは、ローカルな規則群とグローバルな挙動との間にギャップが認められる時である。従来の解決は、クリプキが言う正面からの解決、すなわち以下の二つの主張のどちらかであった。

(1)ローカルな規則群に対して新たな仮定を設ける。

(2)グローバルな挙動への要請や制限を加える。

しかしながら、(1)は「そもそも起源問題は成立していなかった」という主張であり、(2)は、系の外部の起源問題へと問題を先送りするにすぎない。そして、共に「新たな仮定がアドホックに導入されている」との批判が不可避である。これは、西部が「遠近法的錯誤」と呼び、黒石が「論点先取の困難」と呼んだ問題である。

私は、「遠近法的錯誤が不可避である」という主張を積極的に認める立場を取る。この主張を作業仮説として採用すると、起源問題の成立要件に対し以下の2つの見解が得られる。

(1)ローカルな規則群による素過程のモデル化自体が、「遠近法的錯誤」を許す様なある種のローカリティを持つ観測者の行為として理解される。

(2)齟齬を認めうる視座としてのグローバルリティは、先行的に与えられているのではなく、「齟齬の発見」によって構成される。

これらの見解から、観測過程としての素過程のモデル化とその時間発展(シミュレーション)を試みたい。

起源問題それ自身は、モデルの契機として用いられている事に注意せよ。我々は、起源を理解するとは、起源問題に答える事によってではなく、モデルの時間発展によって、それが否定されるが故に発見/構成される「議論の前提」を確認する

事を通じてなされると考えている。現在、起源問題の具体例としてマルクスの価値形態論および岩井の貨幣論における貨幣形態(第四形態)の問題を検討している。(第四回東京大会発表に向けて準備中)

ポスターセッションでは、その前段階として以上の様なアイデアと方向性を紹介し、我々のこれまでの研究成果を下に、その可能性や有効性について検討する。

[ポスター発表5] 代名詞としての貨幣

篠原修二(神戸大学・院・自然科学)

従来、交換媒体としての貨幣の起源を扱った研究では、特定の財と交換媒体特性の間の接続過程が問われてきた。これまで貨幣として利用されてきた財は貝殻や金属、紙等の広範な財であり、これらの財間に共通の属性は認め難い。また、交換媒体特性は、各財が本来持つ属性とは異質であり、財固有の属性に還元することは不可能である。しかしながら一方で、貨幣は単なる観念ではなく何らかの財、例えば金、であることもまた事実であり、貨幣の起源問題に答えるためには、交換媒体特性と何

らかの財との結びつきの必然性が示されなければならない。一方で、交換媒体特性が財固有の属性に還元できないことを認め、他方で交換媒体特性が何らかの財に付着することを根拠付けようとするのは逆説的な行為である。貨幣の起源問題における困難はこの点にある。ここで、第一に付着するという財と交換媒体特性の関係は如何なるものか、第二になぜ交換媒体特性が任意の財にではなくある特定の財のみに付着するのかという二つの問題が生じる。本報告ではこれらの問題について考察するため、語とその指示対象との関係に着目し、語「貨幣」「金」「交換媒体」は各々代名詞、固有名詞、普通名詞であるという観点から議論を行う。また、代名詞、固有名詞、普通名詞の三者関係を明確にするため、例として各々「彼」「太郎」「男」を用いる。「彼」と「男」は語の適用範囲を等しくするが同義語ではない。前者は固定指示子であるのに対し、後者は非固定指示子である。したがって「彼は男である」はトートロジーではない。「男」は男性を意味する。これに対し「彼は太郎を直接指示し「太郎」と同等の役割を演じる一方で同時に男性を含意する。今回の研究会では、代名詞「貨幣」と固有名詞「金」、代名詞「貨幣」と普通名詞「交換媒体」の関係を考察することで間接的に「金」と「交換媒体」の間の付着するという関係について論じる。

[ポスター発表6] 自律分散型市場における貨幣

西部忠（北海道大学経済学部）

自律分散型市場では、二種類のバッファ 実物ストックと金融ストック の切り離し機能により経済主体間の緩やかなネットワークが形

成されている。ここでいわれる金融ストックの最も基本的なものが貨幣である。本報告は、自律分散型市場における貨幣の存在性格を考える。

「貨幣とは何か？」

この問いは既に貨幣を主語である貨幣以外のものにより説明ないし定義することを構造的に強いている。しかし、貨幣はその自己言及性ゆえに、他のものによる定義が困難である。われわれは、売りと買いの日常意識を経由しつつ、貨幣に関する先の問いが実は論理的には答えられないものであることを見る。

「貨幣とは、貨幣として使われるから貨幣である」といわれるように、貨幣は、それ自身には実体的な存立の根拠を持たず、それが貨幣として各経済主体によって受領されることを通じて市場を流通しつづける存在である。この自己循環論的かつ自己遂行的な存在性格が貨幣を特徴付ける。貨幣とは、自分の靴紐（ブートストラップ）を持ち上げることで自分を持ち上げているような、極めて奇妙な「社会的存在」である。

物々交換と貨幣交換のあいだには乗り越えがたい溝があるため、貨幣を交換から導出しようとする「交換先行説」や貨幣を商品集合に属する一商品とみる「貨幣商品説」など、両者を架橋しようという種々の試みは、概念定義上の難点を孕まざるをえない。われわれは、一般均衡理論、進化ゲームによる貨幣の自成・自壊モデル、クラウゼの貨幣論にいかなる問題点があるかを検討していく。

貨幣とは、貨幣として使われる限りで貨幣であるといった自己遂行的な存在性格を持つ、非実在的な存在である。貨幣のこの特異な存在様式は、貨幣のモノ性を否定し、超越論性を要請する。われわれは、この観点から貨幣を市場理

論に定位するためには、貨幣をモノの集合の外部に定位し、無定義語（非モノとしての抽象的富）として商品概念に先行して定義すべきである、と主張する。貨幣は、むしろ貨幣交換（売りと買い）によりモノを商品化し、商品概念を派生させるものとして、したがって、市場という商品流通の「場」を成立させるものとして把握される。こうして、「貨幣とは何か？」という問いは「貨幣とはどこか？」という問いへ置き換えられ、貨幣をめぐる問題設定は貨幣発生論や流通根拠論から市場機能論へと転回される。

貨幣生成論や流通根拠論は貨幣の謎を解くかに見えて、実際には、流通手段（フロー）であるだけでなく価値貯蔵手段（ストック）でもあるという、貨幣の本質を隠蔽してしまう。フローとストックという二面性を持つ貨幣は、商品交換を円滑化する単なる流通手段ではなく、商品流通を駆動・停止するバッファである。それは、自律分散型市場を形成し、そこで物的ストックとともに金融ストックとして緩やかな経済調整機能を果たすものなのである。

[ポスター発表7] オーストリア学派のフリーバンキング論

橋本千津子（北海道大学・院 経済）

フリーバンキング制度とは何か。それは、民間銀行業務に対するさまざまな裁量的規制を撤廃するだけでなく、通貨の発行権をも複数の民間銀行に認める自由かつ競争的な貨幣信用制度である。銀行券発行自由をめぐる論争は、19世紀半ばにいわゆる銀行学派と通貨学派の間でなされたが、中央銀行制度の発展によって終止符を打たれた。しかし、1970年代になると、ハイエクの『貨幣発行自由化論』を

継起に、現代オーストリア学派によってフリーバンキング制度について体系的な研究が再開された。それは金融自由化とともに広がりを見せ、現在にいたっている。

本発表ではオーストリア学派のフリーバンキング論に関して、その「理論」を整理し、「政策への含意」を論じ「諸問題および現代的意義」を検討する。

「理論」としては、まず始祖メンガーの貨幣論にフリーバンキング論の源流を探る。続いて、ミーゼスの貨幣信用制度論の変遷を整理し、そのフリーバンキング構想を紹介する。最後に、ハイエクが提示した実際的な提案と社会構想レベルの提案の整合性を問いつつ、共通する原理を見出す。それは、制度の創造的な「進化」をもたらす、「発見過程」としての「競争に開かれた自由な市場制度」の創設である。しかし、ハイエクも認めているように、「自由はつねに新たな危険を生み出す」ことにも注意が払われなければならない。

さらに「政策への含意」を導くために、中央銀行による「金融政策の有効性」という問題をとりあげる。フリーバンキング論者の他学派批判を整理し、「ルール」か「裁量」かという議論の枠組みを超える理論としてフリーバンキング論を位置づける。

最後に、オーストリア学派のフリーバンキング論に内在する諸問題を指摘しつつこれを検討し、その現代的意義を探る。

オータムコンファレンス

ポスターセッション感想記

中島義裕（大阪工業大学非常勤）

1. 初めてのポスターセッション

先日（9月18日）行われた進化経済学会東

京大会オータム・コンファレンスで、おそらく国内の経済学の学会では初と思われるポスターセッションによる発表が試みられました。有賀委員長、江頭委員をはじめ進化経済学会東京大会運営委員会で発案し実施されるに至りました。私は幾度かポスターセッションでの発表経験がありましたので、微力ながら多少のお手伝いをさせて頂きました。

ポスターセッションは、参加者間の交流や議論を深め、学会の活力を向上させる為に非常に有効な発表方法です。今後、進化経済学会はもちろん様々な研究会でも、この方法が取り入れられる事を期待します。その一助となるように、今回ポスターセッションを実施するにあたって検討した内容をご紹介します。

2. ポスターセッションとは

最初に、ポスターセッションについて説明します。江頭委員が作ったホームページに図入りで詳しく載っていますので、是非一度見て下さい。

www.res.otaru-uc.ac.jp/~egashira/post/poster.html

畳一枚程度のボードに、発表の流れに沿ってキーワードや図表などを書いたA4紙を15枚から20枚程度の紙を貼ります。口頭発表で使うOHPやレジュメを紙に書いて貼るといった具合です。一つの会場の中にこのようなボードが幾つか並び、同時に発表が行われます。口頭発表では、各発表が時間で区切られているとすると、ポスターセッションは空間で区切られている訳です。

聴衆は、貼り出してあるポスターを眺めながら会場内を歩き回り、興味のある研究を探します。そして、詳しい内容を聞きたい人が集まった所で発表者が説明をします。2-3人が立ち止まってポスターを眺めている所で発表者が「ご説明しましょうか？」と説明を始めるとい

う具合です。

ポスターセッションは、研究発表のフリーマーケットのようなもので、発表者も聴衆も自由に発表や討論に参加できます。同時に多くの発表がなされていますので、発表者も自分のポスターを離れ、聴き手として他のポスターを見たり発表を聞いたりしながら会場を歩き回る事も許されるのが普通です。

3. ポスターセッションのメリットとデメリット

ポスターセッションは、もともと発表数が多く口頭発表の時間割が困難な場合に用いられて来ました。修士課程の学生も発表する理科系の学会では、発表が数百になる事も稀ではありません。これまで経済学等の学会でポスターセッションが採用されて来なかったのは、そうした事情に悩まされる事が無かったためであると思われます。

苦肉の策であったポスターセッションは、しかしながら口頭発表と比べて幾つかのメリットがありました。進化経済学会や他の研究会等では、人数の問題などはありませんので、ポスターセッションのメリットを有効に生かすという目的を持たない限り、ポスターセッションを採用する意味がありません。そこで、口頭発表と比較しながらポスターセッションのメリットとデメリットを整理したいと思います。

口頭発表は、多くの人に発表をするという点では非常に優れておりますが多くの人を対象とする為、どうしても一方通行の伝達になってしまいます。ポスターセッションは、小人数を相手にしますので発表者と聴衆の間に垣根がありません。研究発表も聴衆に聞いてもらうためになされるというよりは、議論や会話の「話題を提供する」という意味合いが強いと思いません。

そこで、ポスターセッションのメリットは以下の点等になります。

[聴衆のメリット]

「質問しやすい」

「納得できるまで討論できる」

「議論を通じて自分の研究との接点を見つける事ができる」

「背景にある研究方針まで聞く事ができる」

「発表者と知合いになれる」

発表者のメリット

「研究の背景等深い所まで議論ができる」

「自分の研究に興味を持つ人と知合いになれる」

「意外な観点からの指摘が得られる」

「今後の研究の方向性やアイデアが得られる」

その反面、デメリットとしては以下のもの等があげられます。

[聴衆のデメリット]

(時間が決まっていない為)

* 「途中からしか説明が聞けない場合がある」

* 「説明を聞きに行く順番がバラバラになる」

(集まった人数が多すぎる場合)

* 「ポスターが見にくい」

* 「話が聞き取れない」

(議論が主体である為)

* 「発表途中で、発表者が特定の聴衆と専門的な議論を始めてしまい、他の聴衆にとってあまり興味が湧かない展開になる事がある。」

[発表者のデメリット]

「他の発表を聞きに行く時間が無い場合

がある」

「誰も聞きに来ない場合がある」

「説明の流れをコントロールしにくい」

「何度も発表するので体力的に厳しい」

「半日ばかりで発表しても10名程しか聞いてもらえない」

メリットもデメリットも「小人数を相手に、自由に発表する」という特質の両面です。ポスターセッションは参加者の中で発表者の占める割合が多い場合や、発表者、聴衆共に広い分野からの参加が見込める場合等に生かされると思います。そのため実施するにあたっては、議論を行う事から得られる(創発される?)活力を引き出したい場合や学生間の意見交換を促進させたい場合等、明確な目的意識が必要であると思います。

4. 実施に当って

ポスターセッションを実施するにあたって、生物物理学会(この学会の年会では一般発表が全てポスターセッションで行われています。)等の実際に行われているポスターセッションを参考にいたしました。これらのポスターセッションで採用されているアイデアを基に、経済系の学会で用いるか否かを検討しました。以下、アイデアごとに紹介します。

[プレビュー]

ポスターセッションの冒頭で、発表者がOHP 1枚、1分間という制限で自分の研究を紹介します。発表数が多い場合、興味のある研究を全て聞いて回る事は出来ませんので、どの発表を聞くのかを決める為の参考にします。短い時間での紹介ですが、かなり参考になります。通して聞く事で、どのような発表があるのかを大雑把に掴む事もできます。今回のオースタム・コンファレンスでは、発表者が7名と少なかった為特に行いませんでした。

[顔写真と名刺]

ポスターセッションでは、同時に多くの発表が行われる為発表者も他の発表を聞きに行きます。そのため、聴衆が予稿やプレビュー、ポスターを見て詳しい説明を聞きたいと思っても、ポスターの前に発表者がいるとは限りません。そうした場合、ボードに顔写真や名刺が貼ってあると発表者を探す事ができます。また、予稿集には簡単な連絡先しか載っていない場合に名刺を貼っておくと、その後の連絡が容易になります。今回のオータム・コンファレンスでは、予稿集に顔写真を載せました。参加者が多くなりますと、印刷代の問題等も出て来ますので、発表者が各自で名刺や顔写真を用意するようお願いしなければならないと思われます。アブストラクト集参照。

[時間配分]

ポスターセッションは、発表や報告というよりも議論を行う面が大きいので基本的に「時間が多すぎる」という事はありません。ポスターセッションを成功させる鍵は、いかに時間を取れるかという所にあると言えます。

一般的には、半日をポスターセッションにあてる場合が多いようです。人数が多い場合、発表者が自分のポスターの説明をする発表義務時間を設ける事もあります。上で触れましたが、ポスターセッションでは同時に発表が行われますので、自分のポスターの説明ばかりではなく、他の発表を聞きに行く時間も欲しくなります。その為に発表する時間と聞きに行く時間を会場側で設定する訳です。もちろん、聞きたい人が多い場合は義務時間以外の時間にも自分の研究発表を続けても構いません。

例えば午後をポスターセッションに充てる場合、以下のようなスケジュールになる事が多いようです。

13時-14時 プレビュー

14時-15時 発表番号奇数番の義務時間

15時-16時 発表番号偶数番の義務時間

16時-17時 自由発表

今回のオータム・コンファレンスでは、発表数が少なかった為プレビューや義務時間等をとりませんでした。本格的に実施するにあたっては、こうした点を配慮した方が良いでしょう。

[プログラム]

口頭発表とポスターセッションを同じ時間帯に行っても良いか、または、午前中をポスターセッション、午後を口頭発表とした場合に、午後ポスターを貼ったままにして、希望者は説明を聞ける様な形にした方が良いのかという問題があります。これは会議や年会、研究会の方針に関る為、大いに議論すべきであると思えます。

口頭発表も、複数の会場で同時に行われるのが普通ですし、参加者によっては、聞きたい口頭発表の合間にポスターを読んだり、より突っ込んだ議論をしたい場合もあるでしょう。

今回のオータム・コンファレンスでは、一般講演の時間帯にも並行してポスターセッションを行っていました。オータム・コンファレンスは一般講演が主体で、ポスターセッションはデモンストレーションという意味で行われたからです。しかし、一般講演を聞きに来られた方で興味のあるポスターを聞く時間が取れなかった方や、発表者で一般講演を聞きに行けなかった方もありました。限られた時間の中で行われますので全てを満足させる事はできませんが、ポスターセッションを開催する目的を明確にする事で良い形のプログラムが作られるとおもいます。

[発表にあたっての注意点]

今回のポスターセッションは、発表者も聴衆も初めての経験でした。また、今後も初めての方が多いいと思われます。そこで、今回ポスターを作るにあたって検討した事を紹介したいと思います。ポスターは、説明する時の補助的な資料であります。自分がポスターの前を離れている時、もしくは、発表している途中でも人越しに、ポスターだけを見ている方がおります。そこで、ポスターだけを見ても研究の流れや内容がわかるようなものにする事が大切です。また、一度に2-3人に説明するのが普通ですが、注目されている研究などですと、人だかりができる事もあります。その為、大きい文字で簡潔にまとめる事も大事です。「1メートル離れた所から見ても文字が読め、研究内容がわかる」事を目安にすると良いでしょう。また、色や図を多用してわかりやすくする工夫も必要です。あまり詰め込み過ぎると説明する方も聞く方も疲れてしまいます。

5. 今後について

今回のオータム・コンファレンスのポスターセッションは概ね好評でした。発表者、聴衆共に熱気のある発表会でしたので、参加された方にはポスターセッションの雰囲気をも十分に味わって頂けたと思います。そして、東京大会年次大会でもポスターセッションが行われる事になりました。今の時点では、多くの方にポスターセッションとはどういうものであるかを体験して頂くという事が最優先されると思います。東京大会のポスターセッションには、立ち寄るだけでも結構ですので一人でも多くの方に見て頂きたいと思います。

第4回 東京大会にぜひご参加ください！！

2000年3月25-26日(中央大学駿河台記念館、御茶/水)

連絡先：東京大会事務局 〒192-0393 八王子市東中野 742-1 中央大学経済学部

tel. 0426-74-3351 fax. 0426-74-3425 evolution@tamacc.chuo-u.ac.jp

ポスターセッションは、場所さえ確保すればかなりの人数でも対処できます。完成された研究の発表の場というよりも、ある程度の発展段階で広く議論を行える場という意味合いがあります。広く大学院生に発表の場を提供するという意味では最適の発表方法であると考えられます。大学院生の方や大学院生の研究指導をなさっている先生方には、発表の一つの選択肢として、考えて頂きたいと思ひますし、その為にも一度見ていただきたいと思ひます。

最後になりますが、私の個人的なお話をさせて頂きます。私が修士課程にいた頃、生物系の学会のポスターセッションで複雑系研究の著名な研究者が発表していました。友人と二人で聞きに行った所、丁度他に聴衆がいなかったのので、私達の為だけに発表をして頂きました。普段は教科書や演壇を見上げる形でしか接する事ができない先生ですが、そこでは「研究者として同じ問題を一緒に考える」という経験をさせて頂きました。自分が「研究者になること/研究者であること」を実感した最初の経験でした。

ポスターセッションには、良きも悪きもインフォーマルなイメージがありますが積極的にメリットを生かす事で、非常に良い場を提供する手段であると思ひます。皆様の参加と議論を通じてポスターセッションが、進化経済学会をはじめ様々な機会でも用いられ、発展して行く事を期待します。

【会員名簿からの削除】

退会会員：星島一夫、川瀬光義、古賀義弘、百地章、野澤元、田口雅弘、塘茂樹、
二宮厚美、第一生命経済研究所

入会意思未確認のまま名簿記載につき削除：野口旭、小田宗兵衛（理事会後判明）

誤記による記載による削除：出口雅弘

進化経済学会 平成 10 年度決算 (平成 10 年 4 月 1 日～平成 11 年 3 月 31 日)
(単位：円)

収 入			支 出		
概 要	10 年度予算額	10 年度決算額	概 要	10 年度予算額	10 年度決算額
前年度繰越	952,144	952,144	大会費	1,200,000	978,000
内 費	5,180,000	3,465,000	論集費		798,000
正会員	4,540,000	3,070,000	通信費・印刷	720,000	333,720
(454名)			進化経済学会		90,600
院生会員	490,000	295,000	書籍購入費	1,800,000	1,361,692
(98名)			(出版買取り		1,356,400
賛助団体員代	150,000	100,000	費)		73,859
(3団体)			(含む)		373,240
書籍売却	0	41,000	事務用品費	100,000	287,000
利息	0	161	通件費	300,000	27,972
編大		372,080	送理手会	340,000	354,750
料大		353,417	金事会大	600,000	120,000
会残		(大、会、時、予、稿、上、を、含、む)	演東		46,147
余金			小計	5,060,000	4,046,980
雑収入		2,407	平成 11 年度		
			への繰越金	1,072,144	1,139,229
総計	6,132,144	5,186,209	総計	6,132,144	5,186,209

上記の通り相違ないことを確認致しました。 平成 11 年 8 月 17 日

進化経済学会
監事 澤邊紀生
富森度見

会費納入をお願いします：

* とくに今年度、会費の納入が遅れ気味なのがきがりです。オータムコンファレンスで見られたような若い波や、東京大会の国際企画のような野心的な試みが始まっています。財政基盤の確立の為に、ぜひ早期納入をお願いします。

* 会費を3年以上滞納された方は会員資格を失い、登録会友扱いになりますが、学会に対する債務は残りますのでご注意ください。自発的に退会される方にも、未納会費の請求をさせていただきます。詳細は事務局にご連絡ください。9月の第7回理事会で入会審査をすまされた方は、1999年度からの会員として扱います。これからの入会者は、原則2000年度からの会員となります。

納入先：郵便振替口座：01030-1-22493 進化経済学会

会費：個人会員年額 10,000 円（大学院生、OD は半額）。

会費納入確認や、領収証が必要な方は事務局にご照会・ご請求ください。